

地域社会に暮らす長期定住外国人の日本語使用実態

佐野香織*

Long-Term Brazilian Residents' Use of Japanese Language :

A Case Study

SANO Kaori

abstract

Statistics shows that the number of foreigners living in Japan has been increasing. Brazilians form the third largest group of foreigners in this country, which has recently become a significant subject of discussion especially regarding long-term foreign residents. Under these circumstances, Japanese language assistance by Japanese people in the community and by the government is much needed for those people.

This research reported on one long-term Brazilian's language (Japanese) usage based on the analyses of her utterances. The findings show that her spontaneous utterances mainly consisted of nouns, and her usage of verbs was highly limited.

We insist on the importance guaranteeing the rights of long-term residents to have the opportunity to learn Japanese.

Keywords : long-term foreign residents in the community, language usage, highly limited usage of verbs, Japanese language assistance, guaranteeing the rights of opportunity to learn Japanese

1. はじめに

本稿は長期定住ブラジル人（成人）1名を対象に行った日本語使用に関する事例調査報告である。近年、地域社会に暮らす定住外国人の増加に伴い、彼らが望む「日本語」を学ぶ機会の公的保障¹の必要性が問われ始めている（山田2002, 尾崎2006）。こうした公的日本語教育を今後考える場合、新規に日本へ参入する人々だけではなく長期定住外国人も当然対象に考えられるべきであるが、その言語使用実態は明らかであるとはいえない。特に日本語でのコミュニケーションに支障があると感じている長期定住外国人を調査したものは管見の限り見当たらない。こうした長期定住者とのより良い共生・社会作りを考える必要性が問われており、公的保障を考えるならば長期定住外国人が学びに求めるものは何かということもあわせて考える必要があるといえるだろう。

筆者は日本人との接触が少ない長期定住外国人と彼らの母語で会話をしている際に、「動詞は難しい」「日本語での会話では名詞だけでも何とか分かってもらえるが、動詞を使って言いたいことを表現出来るようになりたい」という話を聞いたことがある。同様の話は日本人との接触が少ないブラジル人の指摘として、動詞が最も困難であるという報告（青木2004）があるがこれらはエピソードレベルに過ぎない。また、定住外国人の初期レベルでは動詞の使用が困難であり名詞使用が多いという報告もあるが（谷口1998等）、詳細は明らかになっているとは

キーワード：地域社会に暮らす長期定住外国人、言語使用、動詞使用困難、日本語支援、日本語学習保障

*平成18年度生 国際日本学専攻

いえない。動詞使用が難しく、名詞が多用されているという状態とはどのようなものであるのだろうか。

以上のような背景から、本研究は長期滞在者の日本語使用について、手始めとして名詞、動詞の使用を中心に詳細を記述し、その実態を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

まず、海外・日本国内における定住外国人の第2言語(L2)習得研究での言語使用に関する知見を簡単に概観し、次に日本語を対象としたL2習得研究の知見をあわせて見ていく。

ヨーロッパにおける定住外国人のL2研究では、データの縦断的な観察によって、目標言語における普遍的な発達段階を示している。ESFプロジェクトはヨーロッパの移民を対象とした第2言語習得研究プロジェクトである。L2に関わる要因、構造などがテーマになっているが、そのうちの一つとして、以下の(1)のような成人移民の第2言語発話発達段階をあげている(Klein & Perdue 1992)。

(1)

- ① 名詞句構造(Nominal utterance organization): NUO
簡潔で接続のない名詞並列、形容詞、助詞、時に副詞で構成される名詞句の発話を中心とする段階。欠けているのは動詞の構成力である。
- ② 不定動詞構造(Infinite utterance organization): IUO
動詞の出現による構成力が出てくるが、不定詞、定動詞の区別がない段階。
- ③ 定動詞構造(Finite utterance organization): FUO
定動詞・不定動詞の区別がある。動名詞・分詞などとの使い分けができる段階。
しかし、すべての学習者がたどりつくわけではない。

Klein&Perdue (1992, 1997) では、①のNUOをPre-Basic variety、②のIUOをBasic varietyと段階づけ、成人自然習得者の発話特徴における体系としている。

アメリカでの研究においては、定住外国人を対象とした長期縦断研究がある(Schumann 1978, Schmidt1983等)。文法をあまり身につけることなく、no + 動詞で否定表現とすること、時制を動詞の活用で表さず副詞・文脈に依存すること等が報告されている。

日本語を対象とした研究においても、就労を目的として滞在する外国人のプロジェクト(土岐1998)で縦断的に研究がなされており、レベルの低い対象者は動詞使用が少なく名詞を多用するという指摘(谷口1998)や、時間概念習得において動詞をほとんど使用しない対象者についての報告(平高・稲葉1998)がある。しかしながら何れの研究においても、どのように他の構成要素と組み合わせて使用しているのかというような詳細は明らかではない。いわゆる自然習得者²の言語習得研究には、長友(2002)らの一連の研究が挙げられる。これらの研究では主に文法項目に焦点をあてて研究がなされているため、時間概念の表出に動詞の活用変化ではなく副詞に依存するというような報告はなされているものの、名詞使用についての記述は散発的である。

梅木(1997)はESFプロジェクトをはじめとするヨーロッパでの習得研究報告を教室学習者との比較を通して日本語で検証しているものである。カタログ説明タスクを行い、名詞・動詞・機能語・モダリティの使用頻度を分析した結果、日本語では名詞使用頻度が高く動詞の使用頻度は低いというKlein&Perdue(1992)の結果は支持されなかったとしている。しかし対象者は「日本人との接触を積極的に行う」「コミュニケーションをとる頻度が高い」人を選択しており、初期段階に注目したものではない。

以上の先行研究では、いずれも名詞使用の多用や動詞の使用が難しいことなどが挙げられているが、その詳細は明らかではない。長期滞在做しているが、日本社会との接触頻度が低く、コミュニケーションを取ることが難しいと感じている人々の日本語使用実態についての研究の必要性は高いといえる。

3. 調査概要

3-1 調査対象者

対象者は日系の夫・家族と共に来日した、日本社会・日本語話者との接触経験が少なく、コミュニケーションに困難を感じているブラジル人1名(20代)である。母語はポルトガル語、家族は、夫・子供2人(9歳・3歳)、祖母(日系2世)で、夫は日系3世だが日本語はほとんど話せない。対象者は日系人ではなく、家族内の会話はポルトガル語で行われている。1996年に就労を目的として来日し、滞日約8年(一時帰国を除く合計年数)である。職場ではブラジル人数人と共に働いており、日本語話者との会話は朝礼や休み時間に交わす挨拶程度であるということである。体系的な日本語学習の経験もなく、今まで定期的に日本人と日本語で会話をかわす機会も持っていなかった。居住地域は東京近郊A市でブラジル人集住地域ではなく、都心地域のベッドタウンと呼ばれる新興住宅地である。

3-2 調査データ収集と分析

調査データは、対象者が定期的に支援活動に参加し始めた2004年9月のデータである。東京近郊A市の外国人支援活動において、活動の中心である日本語を母語とする支援活動参加者(以下支援者とする)との自由なトピックによる1対1での会話を録音・文字化した資料をデータとした(43分間)。この日のトピックは、最近の出来事であった。筆者は、支援活動参加者の一人としてその場におり、会話の流れ、発話意図が分かる程度の距離に常に位置し、会話の理解に必要な文脈はメモを取った。

分析には、日本語から単語の頻度統計情報を作成するソフト、KHCoder³を使用し以下のような手順で行った。

1. 茶筌⁴を用いて、文字化した調査資料データの形態素解析を行った。
2. KH Coderで品詞検索を行い、調査資料データのすべての品詞を抽出した。
3. 品詞ごとに出現頻度数・異なり語数を算出した。
4. KWIC(Keyword in context)検索でコンコーダンス(対象の語が使用されている文を見るもの)を作成、使用詳細を調べた。またフェイスシート調査⁵・事前に行った母語によるインタビューを考察の参考とした。

4. 調査結果と考察

4-1 品詞別使用頻度と異なり語

調査対象者の品詞使用について、使用頻度・異なり語の双方の結果は表1の通りである。

表1. 品詞別使用頻度と異なり語(数)

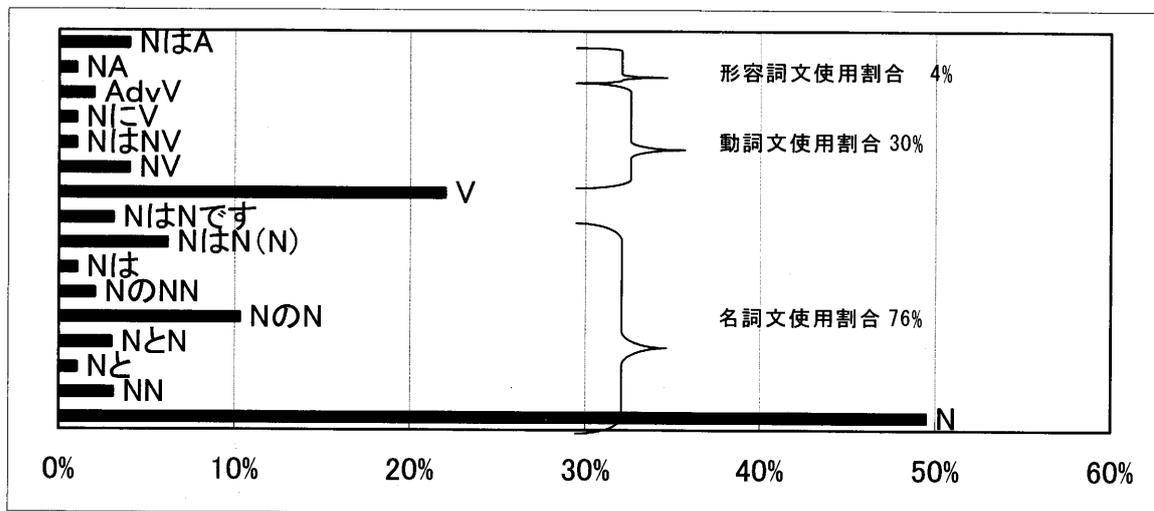
品詞	頻度	異なり語(数)
名詞	105	私(11) 主人(6) みんな(6) 名前(5) ダンス(5) お父さん(4) 海(4) B(子供の名前)(4) K(夫の名前)(3) H(友人の名前)(3) お母さん(3) 家族(3) 子供(3) 夜(3) ミュージキ(ミュージック)(3) C(子供の名前)(2) 兄弟(2) 車(2) 電車(2) 日本語(2) ブラジル(2) G(地名)(2) 8月(2) 今(2) ビデオ(1) 饅頭(1) パッサポルト(パスポート)(1) スカイライン(1) ベイブリッジ(1) 花火(1) 休み(1) お兄ちゃん(1) 焼肉(1) 旦那(1) 友達(1) 話(1) G2(地名)(1) E(地名)(1) T2(地名)(1) 東京・とーきょ(地名)(2) F(地名)(1) M(対象者の名前)(1) 弟(1) 目(1)
動詞	31	分かる(9) 行く(9) 忘れる(4) する(3) 違う(2) 住む(1) 要る(1) 待つ(1) 寝る(1)
助詞	42	は(18) の(11) と(7) ね(3) よ(1) が(1) に(1)
形容詞	26	こわい(6) 好きな(6) 悪い(5) だめな(2) 大好きな(2) 嫌い(2) 涼しい(1) 大丈夫(1) やさしい(1) おっきい(大きい)(1)
副詞	3	ちょっと(2) いっぱい(1)
疑問詞	6	何(3) どんな(3)

名詞の使用が圧倒的に多く（105回）、動詞は頻度・異なり語ともに少ないことが分かる。助詞の使用は、「は」の使用が最も多く、次には「の」「と」など名詞をつなぐ助詞の使用が続く。「の」の使用については、L1 習得・L2 習得双方において「の」の過剰使用が報告されているが（高橋 2004）、本調査ではすべて「名詞（N1）+の+名詞（N2）」の形式で使用されており、「形容詞（A）+の+名詞（N）」のような誤用（例「*赤いの本」）が見られなかったことが特徴である。また、「で」「を」など動詞と関わる助詞の使用頻度は見られず、唯一「に」の使用が1回見られた。「ね」の使用については、「～です」もしくは無標識で名詞文とする箇所に「C（子供の名前）ね」というように名詞に「ね」を直接使用することが見られている。ブラジルポルトガル語を母語とする対象者の習得研究において、ブラジルポルトガル語に発音・出現位置ともに日本語の「ね」と類似する“ne”という談話標識⁶が存在することから、「ね」の多用についての報告と母語転移の可能性が指摘されている（尾崎 1999, ナカミズ 1997, 2000）。本調査の対象者にもこうした理由での「ね」の使用が見られたと思われる。

以上の量的な使用結果から、次節以降使用頻度の高い名詞、助詞、動詞の使用の詳細を見ていく。また、L1 習得研究の知見も合わせて結果を考えたい。L1 習得は成人のL2 習得とは異なるが社会生活を通して日本語を身につけているという点では、本研究の調査対象者より近いと考えられる。また、Ellis（1994）でも、L1 での研究成果はL2 学習者の言語発達パターン研究にも意義のあることを述べているためである。

4-2 名詞、動詞の使用割合

まずは調査対象者がコミュニケーションを図るにあたっての発話において、具体的にどのように名詞、動詞使用を行っているのか、助詞使用との構成を含めてみたものが図1である。



N = 名詞 V = 動詞 A = 形容詞 Adv = 副詞

図1. 名詞、動詞の使用割合

図1によると、調査対象者の日本語使用のほとんどを名詞文使用が占め（76%）、動詞使用は3割を占めているに過ぎない。また、名詞文使用に関しても、名詞のみでの使用が多いことが分かる。これは動詞文使用においても同様で、動詞のみの使用が最も多い。

名詞文の使用が多く動詞文の使用が少ないことが明らかであるが、次節以降、それぞれを具体的にどのように使用しているか詳細を見ていく。

4-3 名詞使用詳細

4-3-1 名詞のみでの使用

4.2でも触れたが、調査対象者の発話全体で大きな割合を占めているのが名詞のみでの使用であった。表1での使用異なり語を見ると、人名や事象・場所が多いことが分かる。例えば、(2)は場所名詞の例である。

(2)

J: じゃあ、どんなところにデートへ行きましたか？

B: G (地名) G、、、

J: 日本で？

B: うん、海。

J: あと、海に行きましたか？

B: うーん、分かんない。

(J=日本人支援参加者 B=ブラジル人調査対象者)

(2) では、Jが調査対象者Bに外出先を聞いた場面であるが、「G (地名)、G、、、」というように場所である地名のみで答えている。また、その直後、「うん、海」というように「海へ行った」のか「海に見える場所で何かをした」ことについて言いたかったのだが、そのまま「海」のみの発話にとどまっている。

場所を表す固有名詞は具体的にその場所が目的地・着地点であることを示唆し、その場所で何かをするということが推測しやすい。指示機能が高いためコンテキストによる推測が可能である。つまり、場所を表す固有名詞一つを何らかのコミュニケーション意図全体を伝えるために使用し、「意図を伝えやすい語」として多用していることが考えられる。

L1 習得では、名詞が動詞より早く習得される、といういわゆる名詞バイアス問題がある。しかし Tomasello (2003) は、実際のコミュニケーションの場においてコミュニケーション意図が分かりやすい語から習得されるのであり、名詞は具体的で際立ちが高く意図の読み取りが容易であることから習得されやすい語の一つであるにすぎないとして社会語用的な補足が必要であることを説明している。本研究においても、このコミュニケーション意図を伝達しやすい語として名詞が単独で使用されている可能性が示唆される。成人の場合、母語と現居住社会言語は異なるが、表象の対象となる概念はすでに習得されている。社会的なインタラクションを通して、例えば (2) の例のような場所名詞「海」ならばその背景知識をも含めた語として、何らかのコミュニケーション意図全体を伝えるために使用するということが考えられる。

4-3-2 「N1 の N2」「N1 と N2」の使用

名詞のみの使用に次いで多く見られたものは、名詞と名詞をつなぐ名詞句の使用、「名詞 (N1) の名詞 (N2)」「名詞 (N1) と名詞 (N2)」の2つであった。(3) はその具体例である。

- (3) a. H (人名) のお父さん
 b. 私のご主人
 c. 私とご主人
 d. B (人名) と C (人名)

「N1 の N2」では、前項の N1、N2 ともにすべて人称・人名であった。「N1 と N2」については、他の形式で見られるがすべて人名の並列である。可能性として、「人名の人名」「人名と人名」というまとまった一つの形式として使用されていることが挙げられる。

L1 習得では、冠詞 a と共起する名詞と the と共起する名詞が初期はそれぞれ決まった組み合わせで使用されていることをあげ、子供の名詞カテゴリ習得は、句・文単位を基に始まっていることが指摘されている (早瀬・堀田 2005:161)。本研究で見られた結果も、助詞のみ、名詞のみが独立した形で使用されていくのではなく、より大きな名詞句から使用している可能性が示唆される。「N1 の N2」「N1 と N2」のみで使用されており、他の構成要素とは組み合わせて使用していないことから、これらは習得初期の最も形成しやすい多語文であることが示唆されよう。

4-3-3 「N は」の使用

本研究では、次の(4)のような、動詞は現れないが、名詞に助詞「は」を伴った名詞文発話も多く見られた。

(4)

J: ご家族を教えてくださいませんか?

M: 家族、。私と、。 子供はふたり。(家族は私と、子供が二人います)

J: あー、おふたり、、、

M: ふたりはおなじ子。(子供は二人とも女の子です)

この例は、「は」をある種のトピックマーカ―とし、名詞を「トピック」として際立たせていることが考えられる。(4)では、調査対象者はまず「子供は」とトピックを取り上げることで、自分の子供の話題という事態全体を提示する。調査対象者は子供を二人とも支援活動の場に連れてきており、それは支援者にも分かっているため、「子供は」と取り上げることでその共有情報を理解することが可能になる。このように常にトピック化することにより、トピックを説明する述語部分がなくても、支援者との情報の共有化が可能になり、会話を成立させていることが考えられる。

4-4 動詞使用詳細

動詞の使用頻度は31回と少ない上、異なり語も10語である。3割以上を『分かる』『違う』というような「Yes-No」を表明するための動詞を用いていること⁷、「ちょっと」を伴って「ちょっと忘れた」というように固まり表現⁸として使用している可能性が高いものが多かった。(5)～(9)に具体例を示す。

(5) 分かんない、、、

(6) 違う!

(7) ちょっと忘れた～

(8) ちょっと待って。

(9) とーきよ、行きたい。(東京へ行きたい)

『分かる』『違う』は、ほとんどが「分かる」「分からない」「違う」という語形で用いられ社会でのコミュニケーションにおいて肯定・否定が求められる場面で対応するための方略として用いられていたことが考えられる。

このような使用の中で『行く』の使用が多かったことは特徴的である。(9)のように、場所を表す固有名詞でトピック化しそこで何をしたのか、起こったのかというコメントの補足を相手に委ねるのではなく、『行く』という移動行為を行ったことを発話者がコメントしていることになる。身の回りの出来事を語る際、「どこに行くか」「どこに行ったのか」という話題は非常にしやすい。L1習得では、軽動詞⁹と呼ばれる『行く』のような日常生活に関係する基本的動作を表す高頻度使用語が多いことが指摘されており、語の意味負荷が少ないため習得しやすいといわれているが(Clark1978)、成人でも同じことが見られる可能性が高い。しかし、本研究の調査対象者は、(2)の例のようにまだ名詞のみでの発話で理解を得ることが多いことから名詞使用でのトピック化が優勢であると思われる。

5. 総合考察

5-1 名詞並列構造

4章では、名詞のみの使用やN1 + N2形式での「N1のN2」「N1とN2」の多用が見られたことを記述した。名詞使用の多くは名詞並列で占められていることになる。これは、その場のコミュニケーションで伝えたいことを優先するために、名詞の並列使用でトピックだけを示し、説明はせずに発話するほうが人間の認知能力の負荷が少ないためであることが考えられよう、

人間の心理的発達の特徴として、「出来る前に始める」ということがあるという (Reed1996)。トピックを挙げ、説明をすることが出来る前に、トピックだけを挙げることで「伝える」ということを始めるということが考えられる。

5-2 Yes-No を示すための動詞使用

動詞の使用に関しては、「違う」「わかる」「分からない」の使用が4割近くを占め、会話の内容について「Yes-No」のみを答えている。本来、動詞の使用には示されたトピックについてコメントをする、という動機と機能があると思われるがそれは行えていないということが考えられる。

支援者とのやり取りを見ると、調査対象者から示されたトピックについて、支援者が動詞を示しコメントも補足している様子がうかがえ、共話で会話が進められていることが分かる。

5-3 言語使用・習得と2つの社会的構造

5-3-1 「指し言語」から「語り言語」へ

L1 習得における言語発達を生態心理学的なアプローチで考察している Reed (1996) では、ヒトの社会生活の生態学的環境はコミュニケーション能力を2つの段階に区別できるようになっているとしており、この2つの段階は言語発達過程において時間的に2分される傾向があると述べている。第一の段階では、親・保護者といった身近な対話相手とのコミュニケーションにまずは場所・モノ・事象・人を表す語をトピックとして単純に示し、理解を委ねる「指し言語 (indicational language)」のような言語形式が生まれるとしている。そして、「語り言語」と呼ばれる言語形式が見られる第二の段階へ移行するとしている。「語り言語 (predicational language)」とは、トピックについて単に指し示すだけではなく、トピックについてのコメントを語るところまで進んだ段階である。「指し言語」は、身近な人々とのコミュニケーションには適しているが、やがて発話者は会話相手へ理解全般を委ねることにフラストレーションを感じ始める。そして「本当に自分が伝えたいこと」をあきらめずに挑んでいくことが自己の発話パターンを変化させる強い動機付けとなり、次の段階である「語り言語」へ移行するのであるとしている。

本研究の調査対象者にも、まず、指差し範囲のことを発話相手にトピックとして提示する「指し言語」として言語化をはかったことが示唆される¹⁰。名詞の多用は、接触機会が少ない中で対話相手となった日本人支援者に、語を「指し言語」で示しトピック提示を行うことで会話を成立させているからであると考えられる。このことは異なり語として、場所や人を表す名詞が多かったことから支持されよう。

L2 習得研究では、機能主義的アプローチをとる研究がある。その中で Givón (1985,1995) は、トピック-コメントの構造の発話が見られる「語用論モード」(pragmatic mode) と主語-述語構造が見られる「統語的模式」(syntactic mode) があるとし、文法化の通時的な流れや L1 習得においても、「語用論モード」から「統語的模式」へ、2段階で移行することを主張している。本研究の調査結果では、名詞1つのみや名詞句のみでトピックを提示することが最も多く見られている。Reed (1996) の主張と考え合わせると、本研究結果は Givón の主張を図2のように「トピックモード」として細かく捉えなおすことが可能であると考えられる。

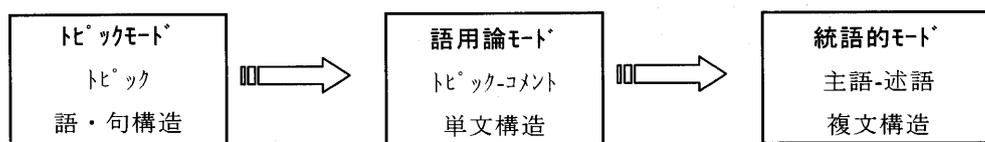


図2. 本研究結果から考えられる発達段階の可能性

5-3-2 長期に渡る動詞使用困難な状況

Klein&Perdue (1992) では、2章で挙げた名詞を中心とした使用である NUO を Pre-Basic variety、動詞使用が見られる IUO を Basic variety と段階づけ、成人自然習得者の発話特徴における体系としている。そして、IUO の発話構造で、日常生活におけるコミュニケーション場面では事足りてしまうため、この Basic variety 段

階で化石化してしまうという。そして、深いコミュニケーションを求めるなら、この段階を克服し、コミュニケーション達成を図ろうという意欲的動機付けが習得プロセスの発展につながることを指摘している(平高 2005)。本稿の調査対象者は、調査結果から NUO にあることは明らかであると思われるが、なぜ動詞の使用は難しく、滞在 8 年にしても IUO 段階へも移行できない状態にあるのだろうか。

本研究の調査対象者は、買い物や日常生活に必要な最低限のコミュニケーションのためという動機から会話における名詞使用が始まった。しかし、日本社会との接触機会が少なかったため、調査対象者が強い想いや考えを伝えられない、というフラストレーションを抱えるような接触機会や、深いコミュニケーションを交わすことがなかったと考えられる。会話の相手に会話の理解全般を委ねつつ共話で最低限必要なコミュニケーションをはかっていた調査対象者は、日本社会や日本人との接点や深い繋がりを求めつつもその機会が持てなかったことがアンケート調査から分かっている。当たり障りのない挨拶・買い物など最低限日常生活に必要な程度のコミュニケーションでは、自己の発話パターンを変化させる「強い動機づけ」にはならなかったことが示唆されよう。

6. まとめと今後の課題

本研究は、8 年の日本滞在後、日本語母語話者とのコミュニケーションを定期的に取りを始めた調査対象者の初期調査事例報告である。コミュニケーションは名詞中心で行っており、相手にトピックについての理解を委ねるだけでなく自らコメントを語るということをしていないことが分かった。しかしながらこの結果は一般化できないことはいまでもなく、今後どのようなプロセスを経るのかを明らかにする縦断調査や、他の同様の定住者について調査する必要があるといえよう。また、「強い動機づけ」とはどのようなものなのか、調査対象者の背景や取り巻く環境についての調査も必要であると思われる。こうした総合的な調査から、長期定住外国人の具体的な支援策を考えていくことが求められるのではないだろうか。

註

- 1 日本語の学習を公的に行うことに関しては、多言語対応社会であるべきであるが、日本社会がそうではないことの補償として、社会への参加を目指した日本語習得支援は行政が行っていくべき「補償教育」であるべきである(山田 2002)。「補償」と捉えるのではなく、地域におけるコミュニケーション手段としては何語でもいいはずであるところを「日本語」を使用することを容認してもらい、その上で日本語学習権を保障するもの(米勢 2006)、等の見解がある。
- 2 長友(2002)では「教室という学習の場を持たないまま日常生活の中で日本語を習得している」「定住型」日本語非母語話者を自然習得者としている。本稿では、日本語の学習保障がないまま地域社会に暮らす一市民としての側面から「地域社会に暮らす(長期定住)外国人」とする。
- 3 KHCorder は大阪大学の樋口耕一氏が作成した分析ソフトで、茶釜(chasen)を用いて出現する形態素情報の頻度統計解析を可能にするものである。<http://khc.sourceforge.net/>
- 4 奈良先端大学院大学の松本研究室で開発された形態素解析用のソフトウェア。<http://chasen.naist.jp/hiki/ChaSen/>
- 5 フェイスシートは土岐(1998)のものを一部手直しして用いた。回答記入は母語(ポルトガル語)で行った。
- 6 従来のポルトガル語伝統文法では付加疑問文“nãõ e?”の縮約形として分類されてきたが、ブラジルポルトガル語の実際の会話では談話標識としての機能を持つ(ナカミズ 2000)。
- 7 動詞語については【】で示す。
- 8 内部構造の分析をしないまま丸暗記の形で複数の形態素・複数の語をひとまとまりとして処理する現象。日本語では定式発話・固定表現、英語では chunk, formulaic speech 等と呼ばれることが多い。
- 9 go, do, make, give, put, find, come, take 等、様態などの付随的な意味を省いた動作の根幹だけの一般的な意味を持った動詞のことである。
- 10 佐野(2007)でも同様のことを指摘している。

参考文献

- (1) 青木直子(2004)「日本語ボランティアへのフィードバック」『接触会話における在日外国人の日本語習得に影響を及ぼす心理的・

社会的要因の研究」平成13～15研究成果報告書

- (2) Clark, E. (1978) *Discovering What Words Can Do*. In *Papers from the Parasession on the Lexicon*, CLS14, 34-57.
- (3) Ellis, Rod. (1994) *The Study of Second Language Acquisition*, Oxford: Oxford University Press. (金子朝子 (訳) (1994) 『第2言語習得序説—学習者言語の研究』研究者出版)
- (4) Givón, T. (1985) "Function, Structure, and Language Acquisition", In Slobin, D. (eds), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition Vol. 2: Theoretical Issues*, Lawrence Erlbaum.
- (5) Givón, T. (1995) *Functionalism and Grammar*. John Benjamins, Amsterdam.
- (6) 早瀬尚子・堀田裕子 (2005) 『認知文法の新展開 カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
- (7) 平高史也・稲葉圭子 (1998) 「外国人就労者における時間概念の習得について」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6～8年度科学研究費補助金 代表者：土岐哲 41-67.
- (8) Klein, W. & Perdue, C. (1992) *Utterance Structure*, John Benjamins, Amsterdam.
- (9) 長友和彦 (2002) 『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成12～13年度 科学研究費補助金研究 萌芽的研究 研究成果報告書
- (10) ナカミズ エレン (1997) 「日本語におけるスタイル切り替えの習得段階 ブラジル人就労者の例—」『阪大日本語研究』9号, 83-110.
- (11) ナカミズ エレン (2000) 「在日ブラジル人就労者の言語行動概観 —日本語使用を中心として—」『日本語とポルトガル語 (2)』国立国語研究所 くろしお出版 127-150.
- (12) 尾崎明人 (1999) 「就労ブラジル人の発話に見られる助詞の縦断的研究 (その1) 終助詞【ね】を中心として」『名古屋大学日本語・日本文化論集』7, 791-107.
- (13) 尾崎明人 (2005) 「多文化社会のコミュニケーション問題と地域日本語教育」平成17年度日本語教育学会春季大会パネルセッション
- (14) 尾崎明人 (2006) 「地域日本語教育の将来構想」『日本語の教育から研究へ』土岐哲先生還暦記念論文編集委員会 37-46.
- (15) Reed, E.S. (1996) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford, Oxford University Press. (細田直哉 (訳) 佐々木正人 (監修) (2000) 「アフォーダンスの心理学生態心理学への道」新曜社)
- (16) 佐野香織 (2007) 「参照点能力とL2言語習得 —長期定住外国人と日本語母語話者との会話データを通して—」認知言語学論集 第7巻 日本認知言語学会 23-31.
- (17) Schumann, J.H. (1978) *Second Language Acquisition: The Pidginization Hypothesis*, In Wolfson, N. & Judd, E. (eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Rowley, MA: Newbury House, 256-271.
- (18) Schmidt, R.W. (1983) *Interaction, Acculturation, and the Acquisition of Communicative Competence: A Case Study of an Adult*, In Wolfson, N. & Judd, E. (eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Rowley, MA: Newbury House, 137-174.
- (19) 高橋織恵 (2004) 「連体修飾構造の習得過程に関する研究概観 —「の」の過剰使用と脱落を中心に—」『第2言語習得・教育の研究最前線』『言語文化と日本語教育』11月増刊特集号 日本言語文化学会 147-167.
- (20) 谷口すみ子 (1998) 「絵の説明タスクの分析結果」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6～8年度科学研究費補助金 代表者：土岐哲 23-31.
- (21) 土岐哲 (1998) 『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6～8年度科学研究費補助金
- (22) Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Harvard University Press.
- (23) 梅木陽子 (1997) 「日本語習得環境の違いが使用語彙にどう影響しているか —スペイン語話者の場合—」『平成9年度日本教育学会 秋季大会予稿集』173-178.
- (24) 山田泉 (2002) 「5. 地域社会と日本語教育」細川英雄 (編) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 凡人社
- (25) 米勢治子 (2006) 「外国人住民の受け入れと言語保障：地域日本語教育の課題」『人間文化研究』Vol.4, 名古屋市立大学 93-106.

(2007年12月1日受理)